Link

2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｉｎｋ

【Ｎコード】
Ｎ９６５６Ｗ

【作者名】
２

【あらすじ】
優等生だけど頭の堅い少年・八坂洋一は、ある日の電車で『旅人』に出会い、前世の記憶を取り戻す。決して交わるはずのなかった人たちとの『再会』。そして、十六年前に自殺したかつての自分。蘇る記憶がもたらしたのは、深い因果のつながりだった。

1　何気ない日の夜

前世があると信じたことは、これまで一度もなかった。
理由は簡単だ。お化けやサンタクロースと同じ。僕のような理屈っぽい人間に、前世なんて概念は信じられない。だって誰も証明したことがないんだから。前世があると言いふらす人も、どこか胡散臭いものだと思っている。
だから僕は断言する。そんなものを追い求めるより、もっと自分のためになることに人生の気力を注ぐべきだ、と。

だけどもし仮に、前世があるとするなら。
きっとどこかで、前世の自分とつながっているのかもしれない。
あの旅人は言った。死んだ人間はこの世に生まれ変わるのだと。
そして僕は、前世の記憶を思い出した。
……そう。思い出して、しまったのだ。

「がー！　もう疲れた！」
開始三分で持田は音を上げた。目の前には山のような問題集と参考書。ノートは新品同様の空白。僕は友達として情けなくなった。
「まだ一問しか解いてないだろ。それじゃ今度のテストに間に合わないよ」
「だってよー、わかんなところばかりだもん」
「普段復習しないからつけが回ったんだ。勉強しないとわからなくて当たり前」
聞く耳持たず、というふうに持田は机に突っ伏した。勉強を教えてと言った当の本人は、早くも終戦ムード。
僕は仕方なく持田の教科書を取った。
「……これか。式をグラフで表せばずっと楽になる。三十秒で解け

るよ」
「でもよ、どんなグラフを書けばいいのかわかんねえんだ」
「じゃあ解く前にまず公式を覚える。でないと赤点はまず確実だろうね」
今度のテストで赤点なら、持田は留年の危機に陥る。
勉強をしてこなかったのは自業自得だと思いつつも、クラスの級長として、そして友達として放っておくことはできなかった。テスト勉強を手伝っているのもそうした理由からだ。
放課後、僕はこうして図書室に居残って持田の面倒を見ている。ただ、中々成果は上がらない。
「勉強なんてさ、ほどほどにやればいいじゃん。ねえ」
「……それ、留年寸前の君が言うセリフじゃないよ」
「はっは、まあそうだな」
半ば冗談で言ったのだろうけど、僕にはあまり面白くなかった。
クラスの大勢の生徒は、持田のようなことを真顔で言いのける。ほどほどにやればいい、嫌いなことはやらないでいい……僕からすれば、逃げ口を叩いているようにしか見えない。学ぶことを嫌がる人間は、きまって怠惰になる。それは確信をもって言えることだった。
僕のこの考えは正しいと思っていた。
「まもなく閉館時刻となります。校舎に残っている生徒は速やかに下校してください。繰り返し連絡いたします……」
ふとノートから顔を離すと、持田がすでに帰る準備を済ませていた。その背後の時計は、日没時刻を過ぎている。
「帰ろうぜ！」持田は元気よく言った。
外に出るとすっかり日が暮れて街灯がともっていた。
「くああ、俺こんなに勉強したの久しぶりだぜ。まったくよ、お前

はあんなに座りっぱなしで腰が痛くならねえのか？」
「別に。それより持田って、家で復習とかしないの？」
「俺はやらん！」
そんな自信たっぷりに言わないでくれよ。
本来自分のテスト勉強に充てるはずの時間をこの人の手伝いに費やしたんだから。
それで堂々と赤点とってもらっちゃ困るんだよ。
……そう言いたかったけれど、とりあえず堪えて苦笑いで済まそう。
「まあこの調子だと何とか赤点は免れそうだしな。あと何日か面倒を見るよ」
「マジで？　おう、お前がそう言うなら信じていいんだな！？」
「馬鹿。このペースで行けば、という意味だよ。今はまだ基礎の『キ』と『ソ』の間ぐらいだ」
「お、おう……」声の調子が一気にしぼんだ。
空に月が出ていた。
本来なら家に帰っている頃合いだが、しばらくはこのくらいの遅さになるのだろうな、と何気なく思った。
取り留めもない話をするうちに駅前に辿り着いた。一つの路線しか通らない小さな駅だ。
「じゃあ俺はここで」持田は言った。
「乗らないのかい？」
「悪いな、俺バス通学なもんで」見ると、駅前にいくつかの停車所があった。
持田と別れて改札口を通る。
駅のホームは地方の小さな町によくある簡素なものだ。時間帯もあって、人の数は少ない。
僕はホームの先頭で待つことにした。乗るのはいつも一両目だった。降りる駅の階段のつくりから、この位置が最も近いのだ。
二人ほどそこにいた。

一人は大学生ほどの男で、携帯電話を片手に誰かと楽しそうに話をしている。付き合いがいいのだろうな、と直感的に思った。
もう一人は僕と同じ高校の制服を着た女子。ヘッドホンで音楽を聴いている。見かけない顔だから、同じ一年の生徒ではないだろう。おそらく上級生だ。
もちろん二人とも他人同士。親しく声をかけることもなく、後からやって来た僕には見向きもしない。
「う、ううう……」
……傍のベンチにもう一人、見落としていたらしい。女性が気持ち悪そうに口元に手を当てていた。ずいぶん酒に酔った様子だから、飲みすぎなのだろう。
どこか旅行者のような雰囲気を出していた。

2　旅人

（あの人大丈夫かな？）

僕の不安は電車に乗り込んだ後も消えなかった。斜め隣の座席に座り込む女性の顔は蒼白だ。明らかに飲みすぎが原因だろうけど、先ほどからずっと何かを堪えている様子から見るに、少し危険な状況にある。

先頭車両には、僕と旅行者らしき女性を除けば、二人しかいない。先ほどの上級生と大学生。どちらも女性の異変に気付いているようだった。

いたたまれなくなった僕は席を立った。

「あの、すいません」

生気を失った女性の顔が、僕に向けられる。口を押えているため言葉は出ない。

僕は鞄からビニール袋を取った。帰りがけに持田とコンビニに行ったとき、飲み物を買っていた。これは、その時のコンビニ袋だ。僕にはあまり必要のないものだし、容量が大きい袋なのも幸いだ。

「これ、よろしければ使ってください」

こくり、とその女性は一度だけうなずいた。

僕は急いで目線を外し、少し席を離れた。後ろで気持ちの悪い光景が始まった。どろどろした液体が袋に飛び散る音の感触、久しぶりに聞いたような気がする。

（……嫌なこと思い出すなあ）

あれは中学のころだ。

昼休み後の授業、午後一時半くらいだったか、教室で横の席の生徒がぶるぶる震えていたことに気が付いて……その瞬間にはもう、

腐った酢の匂いが教室に広がっていた。あの後しばらくはラーメンを食べなかったような気がする。
あのことを思い出してしまった。忘れよう。今は窓の外を見て、夜の景色を楽しもう。

「あ、やばい……」

車内がスクリーンのように映るガラスの向こうで、隣のシートにいた上級生が立ち上がった。
振り返って、彼女の行く先を追った。どうやら女性にまた何かあったらしい。その手には同じようなコンビニ袋が握られていた。
米のとぎ汁のようなものが、少し床にこぼれ落ちていた。
かなりの量をもどしたのだろう。もう一つ袋が必要だったか。
「ねえ、そこの君」女性の背中をさすりながら、上級生は僕を見据えて「次の駅に着いたらでいいから車掌さんを呼んできてくれないかな。お願い」
「そいつは俺がやるよ」
答えたのは大学生の男だった。
「いいんですか？」
「いーって。これでも飲み会で酔った奴の介抱には慣れてるもんでね」
「じゃあ僕は床を拭いておきますね。できれば新聞紙みたいなものが欲しい所ですけど」

「……ありがとね」

それは女性の声だった。ひどい姿になっているけれど、峠は越した雰囲気だ。
「あ……大丈夫ですか？」
「うん、あなたのおかげで、だいぶん楽になったわ」

上級生は安堵したように一息ついた。
それと同時にアナウンスが流れ、次の駅が窓の外に見えはじめた。
「お酒の飲みすぎはよくないですよ」僕は言った。
「ごめんごめん、あはは」
「笑うところじゃありませんよ」
「ここは少年の言う通り、かな」大学生の男は気さくに笑う。「まー過ぎたことは仕方がないんじゃない？　ただ、この人たちに礼くらいは言うべきだと思うな」
「……お礼ねえ」
「いいですよ、別に」僕はことわった。見返りを求めてやったことじゃない。隣にいた上級生も同じ意見だった。
「またの機会ってことでいいかな？」
女性はそう告げた。
「こんなんでも、昔からほら、受けた恩は返す、ってのが私の主義なんだ。あなたたち三人には、いつかまた、ね」
僕たちはお互いに顔を見合わせた。

「大丈夫かな、あの人」上級生が僕に語りかけた。「どうしてあんなになるまで飲んだんだろうね」
それは僕にもよくわからなかった。
女性は大学生と共に前の駅で降りていた。あの様子だと二日酔いは確実だ。
車内には僕たちのほかに誰もいない。黙っているのもなんとなく変なのでこの人と話を交わしていた。
「私はああなりたくないな。正直、吐いた物を見るのは精神的にこたえる」
「ですね。駅の職員の苦労が少しだけわかった気がしますよ」
「たまにプラットホームでもどす人がいるよね。毎回アレを処理するなんて私にはできないな」
「でもあの人を介抱したじゃないですか？」

「苦しそうな人は放っておけないもんでさ」
彼女は朗らかに笑った。
「……ところで、見たところ同じ高校の人みたいね。きみ、一年の子かな？」
僕はうなずいた。
「ヤサカヨウイチっていいます。『八』つの『坂』に、洋楽の『洋』に『一』って書きます」
「私は二年の若菜綾。きみからしてみれば先輩ってことになるのかな」
この日はテスト前最後の部活で、いつもより帰宅が遅くなったらしい。僕にはあまり実感のない話だった。クラブには入っていない。
「こんな時間までやって疲れませんか？」
「無駄に体力だけはあるんだ」若菜はそう言って「自慢じゃないけど私、生まれてから一回しか風邪ひいたことないのよ。ま、それだけが取り柄なんだけどさ」
僕が降りる二つ前の駅で、若菜と別れを告げた。

3　道

そうして誰もいなくなった車内で、僕はゆったりと座席にもたれかかった。
視界の端にちらりと映る、少量の吐しゃ物。床にまだこびりついている。原因はあの酔っ払いだ。

（……そういえば、お礼って結局、なんだったんだろう）

あの女性とは互いに面識がないはずだった。それはおそらく、若菜もあの大学生も同じだったろう。
またの機会と言っていた。それがいつかは知らない。次に偶然会ったとき、という意味なのか。
いや、泥酔した人の言うことだ。本人も次の日になればすっかり忘れていることだろう。受けた恩は返すと義理堅いことを口にしていたけれど、たかが口約束だ。それに僕も、お礼が欲しいだなんて思っていない。
首を振って、思考を打ち切った。
車内アナウンスの駅名を耳にして、僕は席を立ち上がった。

――――今から思えば、きっかけはほんの些細なことだった。
酔っ払いの介抱をしたというだけの、ありふれた行為。本当に、きっかけは日常の中でもよくあることだった。当然の選択だった、と言うべきだろう。あの場にいた誰もが、当たり前の行動をしたに過ぎない。
しかし、時にはそんな何気ない行動が、人生を変えてしまうのだろう。　僕の日々は、その時を境に新たな方向へとつながってゆく。
かつて自分自身が通った道の存在を、僕は知ってしまう。

『雨城結太』という、道の名を。

4　八坂洋一

九月十六日。
テストまであと一週間。基本的にこの期間において部活動は休止。下校時刻も早めだが、校舎から独立して建つ図書館など一部の場所は逆に下校時刻が延びる。
生徒会あてに届く落し物も、このころには教科書やファイル、プリント類ばかりだった。クラスの級長としてたまに生徒会室を訪れる僕の目にも、そういったものをよく目にする。
昼休みの賑わう廊下を、生徒会室へ向かう。学校から配布物を受け取らなくてはいけない。
「失礼します……あ」
生徒会室の扉を開けた僕は思わず声を出してしまった。教室内には、こちらに背を向けてパソコンの前に向かう生徒が一人。後ろに束ねた髪、少し日焼けした外見。見覚えがあった。
「若菜先輩？」
「むぐ」
振り返った上級生の頬がリスのように膨らんでいる。
傍らに購買の焼きそばパン。一袋空っぽだ。
「むお……君たしかあの時の」
「どうも」
「ちょい……待って」パンの残りを一気にほおばって「なんだ、八坂も生徒会の委員なの？」
「いえ、僕はクラスの級長としてここに」
「そっか」若菜は机の山積みになったプリントを乱雑にあさって、中から複数のプリントを僕に渡した。僕はひとまず礼を言った。
「……テスト期間における特別規則っての？　よくわからんけど。学校側からの通達はそれで全部」

プリントに目を向ける。細かな校則の注意書きがびっしりと印字されているが、前文に目を通す人はいないだろう。
そしておそらく、何年も使いまわしているに違いない。こんな面倒な書類を、毎年作成するようなことは誰だってしないに決まってる。
とはいえ、これらを教室の後ろにある掲示板に貼るのが級長の役目だ。何であれ、規則には従うべきだ。
「紙の無駄だと思うけどねえ」若菜はつまらなさそうに呟いた。
「ところで、生徒会の人たちはどこに？」
「本来なら担当の子が二人いるんだけど、一人は職員室に呼び出し、もう一人は欠席でさ。でも校則として昼休みに誰かいないといけないから、私が代役をやってるの」
「面倒じゃないですか」
「もちろん報酬は戴いたよ。紙パックのコーヒーだけど」
ふふん、と得意げに笑みを浮かべる。紙パックは机にあった……水滴が垂れて、下のプリントを濡らしていた。
ふと、僕をまじまじと見つめてる若菜の視線に気づいた。
「八坂。ちょっといいかな」
「何ですか？」
「実はね、昨日の酔っ払いに会ったんだ」
ほんの刹那だけ記憶を手繰り寄せる。一日前のことを思い出すのに、それほど頭は使わなかった。
「電車の中で吐いた人？」
「そう、その人。今朝のことなんだけどね。昨日のことでお礼をしたいって」
「お礼って何でした？」僕は尋ねた。あの女性の言葉は少し引っかかっていた。それだけに、若菜の話には興味があった。
ほんのわずか、彼女はためらうような仕草を見せる。
「……あれ、なんていうか、これ説明しづらいな」
「え？」

「ねえ、君は前世ってヤツを信じる？」
それは唐突な質問だった。
「あの女のひと、占い師みたいでね。人の前世を占って旅をしているらしいんだ。ちょっと怪しいけどね」
「ということは、お礼って」
「特別にタダで占ってもらったよ」
拍子抜けした。
そりゃ期待してはいなかったけど、それ以上に肩透かしを喰らった気分だ。占い。日常の生活で必要なこととは到底思えない。
「それで、前世を占った結果は」
「病弱な女の子」
言った傍から若菜は鼻で笑った。
見るからに丈夫そうなこの人には絶対に似合わない言葉だ。
「あと、そのうち前世の記憶を思い出すだろうってさ。今のところ私にそんな実感はないけどね」
「お礼をしたいって……ひょっとして、僕も、ですよね」
「同じ制服だったし、見つけるのにそう時間はかからないかもね」
僕はたったいま、『ありがた迷惑』という日本語を思い出した。

それでも校舎を出るのは、夜になってからだ。放課後も持田の勉強を見なければいけない。
持田の学力は軒並み平均点だが、特に数学が致命的だった。中間試験で学年最下位をとってしまい、今季も小テストでは壊滅的だ。まだ学年の半分とはいえど、留年の危機は十分にある。
「なあ八坂。お前ってよくこんなこと続けられるよなー」
持田の声は、誰もいないラウンジに響いた。
「何が？」
「勉強」
僕は好物のカフェオレをすすった。ラウンジの自販機で買ったものだ。街中の自販機より値段が安いのは、学生用に設けられている

からだろう。
何時間も椅子に座るのは体に悪いということで、何分か休憩を取っていた。窓の外は日が落ちていた。
「何事も集中すれば、ずっとやれるものだよ」
「すげえなー。俺には無理だ」
「持田も何かひとつくらい好きなことあるだろ。それに打ち込むのと変わらないよ」
「じゃあお前、勉強が好きなの！？」
「どうだろう」
声を荒げた持田に、僕は首をわずかに傾げた。
「ただ、学ぶことは好きだね。それは数学の問題を解くことだけじゃなくて、色々なこと」
「色々？」
「上手くは言えないかな。もう少し年齢を重ねれば、見えてくると思うんだけど」
「うう、お前の考えてることはよくわからん」
「親からもそう言われてるよ。でも、好きにさせてもらうさ」
自分の行いが全て正しいかはわからない。
けれど、自分の進む道は正しいと信じている。それだけは、胸を張って言えることだった。僕はこれまでの十五年半で、周囲の期待を裏切るようなことはしたことがない。あってもささやかな悪戯ぐらいだろう。ましてや犯罪に手を染めるような真似は絶対にしないつもりだった。
犯罪は嫌いだ。
どんなに小さくて軽いものでも、法律で認められない行為は悪だ。そんなものに関わることなく、そんな人と付き合うことなく、僕は正しい道をまっすぐ歩けばいい。
これまでも、これからも。
僕は優等生として、自分の生きた道に誇りを持っている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9656w/

Link

2011年9月25日01時17分発行